

大阪市立大学地理学教室 同窓会会報 第22号

事務局 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3丁目3番138号
大阪公立大学文学部地理学教室内
TEL (06)6605-2404/FAX (06)6605-2404 e-Mail: yoshi@lit.osaka-cu.ac.jp
振込口座 00960-7-9642

大阪市立大学地理学教室同窓会第22回総会ご案内

なお収束が見通せない新型コロナ禍の中ですが、同窓生の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。今年度は対面授業がほぼ完全に再開され、コロナ禍以前のキャンパスに戻りつつあります。また、今年度4月から大阪市立大学は大阪公立大学となりました。平成12年の大阪市立大学地理学教室創立50周年を契機に設立された『大阪市立大学地理学教室同窓会』も、皆様のご尽力により活動23年目を迎えました。本同窓会の役割は、地理学の研究と教育の振興、地理学教室および現役学生等への支援など多岐に及びますが、最も大切なのは同窓生相互の交流と親睦にあるかと存じます。そのために、平成15年度より地理学教室恒例の年度末行事である卒論・修論発表会にあわせて年に1回の総会を開催しております。

今年度の第22回同窓会総会ならびに茶話会の開催については杉本キャンパス図書館（学術情報センター）10階の研究者交流室にて行います。第22回同窓会総会、茶話会への参加を御希望される方は、木村（yoshinari-kimura@omu.ac.jp）に御一報頂けますと幸いです。

なお、今回の茶話会は従来の予餞会と異なりアルコール類の提供がない点をご留意致します。また、当日の準備のため、必ず事前に参加のご連絡をお願い致します。杉本図書館に入館される際は、入館ゲートにて「地理学教室同窓会に参加」と一声お声掛けください。

記

1 第22回同窓会総会について

日時 2023年2月18日(土) 午後3時10分～
場所 大阪公立大学杉本図書館（学術情報センター）10階 研究者交流室
(JR 阪和線「杉本町」駅下車、東に徒歩7分；本館地区内)
次第 (1) 令和4年度 会務報告（会計報告を含む）について
(2) 大阪市立大学地理学教室同窓会役員改定について
(3) 今後の活動について

2 茶話会について

日時 2023年2月18日(土) 午後4時00分～5時40分
場所 大阪公立大学杉本図書館（学術情報センター）10階 研究者交流室
会費 1,000円（ただし令和3年度卒業・修了生は500円）

お願い 茶話会費につきましては、同封の振込み用紙の通信欄に明細をご記入の上、ご納入ください(メール配信の方で茶話会に参加される場合は、当日受付にてお支払いください)。なお、茶話会にご参加の方は、会場準備の都合上、2月10日(金)までにお申し込みくださいますようお願い申し上げます。

問合わせ先

木村 義成 (大阪市立大学文学部)

電話:06-6605-2404, FAX :06-6605-2404, e-mail:yoshinari-kimura@omu.ac.jp 携帯:080-5380-6551

令和4年度 大阪公立大学地理学教室 卒論・修論発表会 プログラム

<卒論発表>

- 9:20 廃墟探訪と廃墟ツーリズムの可能性
—旧摩耶観光ホテルの事例から— 松本 明凜
- 9:40 無居住神社における神職・氏子の役割と氏子認識
—奈良市内の3神社を事例に— 芳田 翠子
- 10:00 創作作品における遊郭表象
—『鬼滅の刃』と『この世界の片隅に』との比較から— 西田 歩莉
- 10:20 学校外に立地する学童保育所の継続可能性
—大阪市を事例に— 乾 綾友子
- 10:40 部活動の地域移行に関わる地域性
—静岡県掛川市の地域部活動を事例に— 岡崎 史徳
- 11:00 農産物ブランディングと6次産業
—河内地域の「大阪ぶどう」ブランド展開— 尾崎 佳乃
- 11:20 持続可能な発展をもたらす観光と地域性の関係
—岩手県遠野市 ビールの里プロジェクトを事例として— 中島 世南
- 11:40 日本における昆虫食養殖の現状と課題
—食用コオロギ養殖事業を事例に— 城 一登
- 休憩 (12:00~13:00)
- 13:00 大都市圏外縁部の地方創生
—北関東の地方自治体における有料列車支援を事例に— 野田 剛志
- 13:20 宇都宮市のLRT導入計画はなぜ実現したのか
—事業広域化と都市ビジョンの検討から— 増田 一輝
- 13:40 「天王寺」はどこを示すのか?
—手描き地図から見る「天王寺」の認知— 川口 瑛美莉
- 14:00 富田林寺内町の持続可能なまちづくりと女性の活躍 山野井 愛友
- 14:20 神戸市における交錯する鉄道網とその成立要因 中崎 人輝
- 14:40 新華僑によるビジネスの実態と集積要因
—大阪市中央区南部の中国系店舗を事例として— 千川 はるか
- 休憩 (15:00~15:10)
- 15:10 地理学教室同窓会総会

令和4年度卒業論文題目・要旨

廃墟探訪と廃墟ツーリズムの可能性—旧摩耶観光ホテルの事例から—

松本 明凜

本研究では現代での「廃墟探訪」の意味と、「廃墟ツーリズム」の可能性を探ることを目的とする。兵庫県にある「旧摩耶観光ホテル」を事例にとり、以前の廃墟探訪と比較しつつ廃墟の観光化にあたって起こり得る問題を考察する。調査の結果、廃墟ツーリズムはさまざまな課題を抱えていることが明らかになった。だが、一般的にマイナスイメージを持つ廃墟の観光化という動きは、廃墟ひいては地域の活性化になり得る可能性も同時に抱えているといえるだろう。

無居住神社における神職・氏子の役割と氏子認識—奈良市内の3神社を事例に—

芳田 翠子

本研究では、奈良市内の氏神社3社を事例にどのような形で神社兼務が行われ、どのような形で住民が氏子とみなされ、神社と関わっていくのかを明らかにする。調査の結果、信仰の内容によらず、神社運営の主体となる周辺住民との合意によって神職は神社の兼務を行うことが明らかになった。さらに、無居住神社では地縁だけではなく血縁、氏子費の納入、神社との日常的な関係性の深さが氏子として認められる要素となることが示されたが、そうした氏子は減少傾向であり、神社維持のための新たな取り組みが模索されている。

創作作品における遊郭表象—『鬼滅の刃』と『この世界の片隅に』との比較から—

西田 歩莉

本稿では、人々の知識源が創作作品やメディアに依存する現代において、創作作品の分析・比較から、「遊郭」がどのように解釈、誇張、歪曲されているかを明らかにする。結果、『鬼滅の刃』は大正期東京の吉原遊郭を豪華絢爛、且つ凄惨な場所として描き、『この世界の片隅に』は地方都市呉の朝日遊郭を平凡かつ片隅にある存在として描いていた。遊郭が失われ続ける将来においては、これまで以上に描かれた遊郭こそが人々の遊郭像となっていく。しかし、ただそれを鵜呑みにすることは歴史的事実の改竄である。創作に対して、残された歴史と向き合い、真の歴史を損なわないように伝え残していくことが現代において必要なことだ。

学校外に立地する学童保育所の継続可能性—大阪市を事例に—

乾 綾友子

本研究では大阪市内の学校外にある学童保育所を対象に、立地の不均衡の原因と施設の現状を明らかにする。その上で、学校外で継続して運営されるため、または新設されるために必要な条件を考察することを目的とする。調査の結果、施設の立地には各小学校の児童数と保護者の収入が大きな影響を与えていた。学校外で継続的に運営するためには、自治体による支援の充実と学童保育側の情報発信が求められると考える。

部活動の地域移行に関わる地域性—静岡県掛川市の地域部活動を事例に—

岡崎 史穂

本研究では、掛川市で行われている地域部活動について把握し、掛川市の地域性との関係を明らかにする。課題整理や改革に必要な視点が議論の中心となる部活動の地域移行だが、地域との関わりが重要であるため地域性を考慮しながら考察する。調査の結果、掛川市での地域部活動の成立には生涯学習などの土地柄が大きく関わっていた。全国で実践研究が進められる中、背後にある地域性を十分に理解した上で地域部活動の体制を整える必要があるだろう。

農産物ブランディングと6次産業—河内地域の「大阪ぶどう」ブランド展開—

尾崎 佳乃

本研究では、ぶどうの生産地として知られる大阪府河内地域を取り上げ、そのぶどうを使用したワイン生産と販売までを含めた「6次産業化」の取り組みに注目し、持続的なブランド農産物の在り方について考察する。「地域ブランド」を通じた農業振興は、地域社会・経済の持続可能性の検討における新たな視点の提示という点で、社会的意義を持つ。調査の結果、ブランド化戦略において「差別化」の重要性、「地域貢献の意識」「作り手の連携」の必要性が明らかとなった。

持続可能な発展をもたらす観光と地域性の関係—岩手県遠野市 ビールの里プロジェクトを事例として—

中島 世南

本研究では、岩手県遠野市で行われているビールの里プロジェクトを事例として、地域の持続可能な発展に寄与するサステナブルツーリズムの特徴について把握する。また、そのような観光が成立するためのツーリズムと地域の持つ特性と

の関係についても明らかにする。調査の結果、観光による外部からの支援者の獲得とそれを地域に還元するためのふるさと納税の活用等の仕組みが存在することがわかった。また、市民と近い距離感の遠野市行政や、東日本大震災を契機とした、外部とのつながりなど、遠野市が構築してきたコミュニティの特性がプロジェクトの持続に寄与していることが明らかになった。

日本における昆虫食養殖の現状と課題—食用コオロギ養殖事業を事例に—

城 一登

本研究では日本における昆虫食について、関連企業による養殖事業の実態と課題を明らかにした。調査の結果、①昆虫食には生産コストの高さ及び安全衛生基準の未成熟さという欠点があること、②昆虫食と地方は餌の原料調達の関係上親和性が高いこと、③「昆虫食」の概念を再検討する必要があることの3点の考察を加えることができた。昆虫食は社会課題解決のための手段として様々な活用法が期待される。今後は様々な形の昆虫食企業を含めた、昆虫食の新たな可能性について継続的に議論される必要がある。

大都市圏外縁部の地方創生—北関東の地方自治体における有料列車支援を事例に—

野田 剛志

本研究は国の地方創生政策が、北関東の地方自治体を実施する移住支援の一形態である、有料列車での通勤に対する支援の拡大に与えた影響を明らかにした。自治体や鉄道会社の平成期の動向を踏まえ、地方創生の先行研究での指摘と、当該支援の実情を比較し考察した。調査の結果、地方創生と関連交付金の存在により、支援が存続・拡大したことが判明した。移住には有効な施策であるが、交付金目当ての施策としての側面も存在する。支援浸透のためにはさらなる議論が必要だろう。

宇都宮市のLRT導入計画はなぜ実現したのか—事業広域化と都市ビジョンの検討から—

増田 一輝

本研究では、路面電車が次々と廃止される状況にあり、これまで多数の地域でその導入が計画されてきたのにも関わらず実現されてこなかった新設LRTが、なぜ宇都宮市で導入されるまでに至ったのかを考察する。調査の結果、宇都宮市のLRTは渋滞対策という目的から、コンパクトなまちづくりを実現するための手段へと位置づけが変化したことで、事業の説得性を高めたことによ

り実現できたと結論づけた。加えて、その過程には国をはじめとする関係主体の協力があったことも示した。

「天王寺」はどこを示すのか？—手描き地図から見る「天王寺」の認知—

川口 瑛美莉

本稿では、「天王寺」という明確な領域のない地名について、人々がどのような範囲を「天王寺」と認識しているのか、また回答者のどのような属性がその認識と関係しているのかを明らかにする。アンケート調査の分析の結果、描かれる地図は4つのパターンに分けられた。また範囲の認識は、「天王寺」と、隣接する「あべの」という地名の捉え方と関係しており、それらへの認識には居住歴、定期的な通過や訪問の有無、交通手段と関係することが示唆された。

富田林寺内町の持続可能なまちづくりと女性の活躍

山野井 愛友

本研究では重伝建地区の空き家問題と郊外における女性の役割がどのように関わっているのかについて明らかにする。富田林寺内町のまちづくりにおける女性の副業的関与と、それによる空き家の管理・維持への効果について考察する。調査の結果、富田林寺内町では収益性の低さから女性店主の割合が高く、それは職住分離や性別分業といった構造的な側面があるためであった。さらに女性が店主として副業的に関与することで域内の空き家が利活用されていることも明らかになった。

神戸市における交錯する鉄道網とその成立要因

中崎 人輝

本研究は神戸市の鉄道網について、複雑さをもたらした要因を神戸市史や私鉄各社の社史を用いて歴史的・地理的視点から明らかにする。神戸市の交通結節点は三宮地域・神戸地域に分散しているが、戦前の鉄道網形成には特殊な地理的条件や都心の移動、市と鉄道との意見の相違などが大きく影響を与えた。戦後には市と私鉄の共同出資によって神戸高速鉄道が設立されたが、東西私鉄の接続が果たされた一方、さらなる交通結節点の分散を招いた。

新華僑によるビジネスの実態と集積要因—大阪 市中央区南部の中国系店舗を事例として—

千川 はるか

本研究では、近年、中国系店舗の増加が著しい大阪市中央区南部を対象地域として、その実態と集積の要因を明らかにする。中国系店舗の関係者へのアンケート調査及び聞き取り調査からは、各店舗における開業年や従業員の内訳、顧客対象、組合加入の有無、不動産事情など、具体的な実態について明らかにすることができた。また、中国系店舗が集積することについては、1) 中国系不動産会社や中国人オーナーが対象地域に多くの土地や建物を所有していること、2) 日本に住む中国人と中国人観光客の双方を集客するのに適した場所であることが要因であると考えられる。

以上14編

☆同窓会だより

[同窓会顧問の杉本尚次先生訃報のお知らせ]

地理学教室同窓会顧問の杉本尚次先生が、2022年2月20日、享年90歳にて永眠されました。ご冥福をお祈りするとともに、謹んでお知らせ申し上げます。

[第22回同窓会総会報告]

2022年2月19日（土）午前10時より卒論修論発表会が開催されました。前年同様コロナ禍の影響により対面形式での実施が叶わず、発表者も聴講者もオンライン形式での参加となりました。卒業論文16篇、修士論文4篇の発表が行われ、オンラインを介して活発な質疑応答がありました。引き続き、第22回同窓会総会が午後5時より開催され、同窓会・会則変更と会費変更の審議、前年度の会務報告等に関する報告が行われました。

[新大学に向けた取り組み]

2022年4月から大阪市立大学と大阪府立大学が統合され大阪公立大学として開学しました。また、2025年後期に地理学教室は杉本キャンパスから森ノ宮キャンパスに移転する予定です。現在のところ移転先のレイアウト設計や備品選定が行われており、地理学教室は新学舎の高層階に配置される予定です。また、新キャンパス付近に大阪メトロ中央線の新駅が開設される予定です。



南西からの景観

大阪公立大学HPより転載

https://www.upc-osaka.ac.jp/information/morinomiya/about_morinomiya/

大阪市立大学地理学教室同窓会役員

(任期：令和3年3月～令和5年2月)

会 長 山野 正彦

顧 問 山岸 和一郎 石原 照敏 白石 太良 杉本 尚次
松下 任久

運営委員長 木村 義成

運営委員 青木 翔平 大場 茂明 岸本 智洋 島崎 雄貴
立見 淳哉

会計監査 吉崎 広江 山田 理絵子

いずれも敬称略

*大阪公立大学地理学教室ではホームページを作成して、教室スタッフの紹介、講義概要、大学院生の研究報告などの様々な情報を発信しています。同窓会のページも設けておりますので、是非一度ご覧下さい。アドレスは、 <https://www.omu.ac.jp/lit/geo/> です。